

## 『源氏物語』における『白氏文集』引用の特色 —登場人物の口ずさんだ詩句をめぐる—

段 笑 擘\*

An analysis of the quotations from “Po Chu-i’s Collected Works”  
used in “The Tale of Genji”  
— A look at the poems recited by the various characters —

XiaoYE Duan \*

*Received October 31, 2008*

### Abstract

When we study the influence of classical Chinese literature on “The Tale of Genji,” it’s easy to associate “Po Chu-i’s Collected Works” with the novel. How did Murasaki Shikibu, who showed great talent in classical Chinese use her understanding of Chinese poems to write stories, and how did she superbly unify the essence of Chinese culture with the culture of the Heian period? The purpose of this research is to look into this aspect. Moreover, I will also look at all the poems recited by the various characters in the story and analyse them from the Chinese point of view.

From analysing the different quotation styles used throughout the text, we find that the style of “Reciting Poems” is used as the main quotation style. Within that, over 60% of the recitations were by Genji himself.

In this thesis, the style of quotations will be divided into 4 varieties and analysed. They are: “adoption of atmosphere,” “adoption of state of mind,” “original adoption,” and “adoption of descriptive skill and creative motive.” I will analyse those poems from the writer’s creative motive, the development in the recitation of poems as well as the quotation techniques.

### 1. はじめに

周知のように、『源氏物語』は、日本の伝統文学の精粹を受容しただけではなく、中国古典文学及び仏教思想など、他の養分をも吸収して養われてきたものを代表する不朽の傑作である。

---

\* 国際交流センター  
International Exchange Center

『源氏物語』に底流する表現の一つとして、『白氏文集』の存在が大きいことは、既に数多くの研究者によって指摘されてきている。そして、引用数字から見ると、『白氏文集』は59%の割合で過半に達するという事実が明らかである<sup>1)</sup>。そのうち、「登場人物が詩句を口ずさむ」というような直接引用例は、14箇所ほどあるが、全編合計例数154例のほぼ11%を占めている<sup>2)</sup>。では、漢籍に優れた才能を発揮した紫式部は、どういうふうに関詩の芸術を物語の世界に用い、漢文化の精粹と平安文化を融合させたのか。登場人物がこれらの詩句を朗詠する経緯とそこでの作者の意図はいったい何だろうか。

本稿では、先行研究の指摘を踏まえた上で、中国人の観点より、改めて若干の考察と検討を試みる。この際、特に研究対象を引用事例に限定し、これらの事例分析を通じて、『源氏物語』における漢詩引用の特色と技法及び作者の創作的意図を探ることに重点を置きたい。

## 2. 『白氏文集』の意義

清少納言の『枕草子』（一九七段、『新大系』）に、「文は文集、文選、新賦、史記五帝本記、願文、表、博士の申文」とある。文集と言えば、『白氏文集』を指し、漢詩文の文物のトップに位置づけられている。『白氏文集』は、ほぼ同時代である平安時代に伝えられ、教養人の必読書として、学者や文人はもとより、貴族及び女流文学者に至るまで広く読まれ、王朝物語に強く影響しただけでなく、和歌、漢詩の題材にも頻繁に取り上げられている。

『紫式部日記』にこのような記述がある。

「宮の御前にて**文集**の所々読ませ給ひしなど、さる様の事知しめさまほしげに思ひたりしかば、いとしのびて人も侍らはぬもののひまひまに、おとしの夏頃より、**楽府**といふふみ二巻をぞしどけなくかう教へたて聞へさせ侍る云々。」

上の記述によると、『白氏文集』は当時広く愛読されたことがわかる。そして、『紫式部日記』には、紫式部が漢籍に非常に詳しかったことを示す話が幾つもある。例えば、漢学者であった父藤原為時について兄の惟規と共に漢学に親しみ、兄より早く覚えてしまったとか、宮仕え女房として、中宮彰子のもとに出仕している間、紫式部が中宮に白楽天の「楽府」二巻を教えていたとかの類である。従って、宮に進講できるほどに紫式部が実力を備えていたことを認めることができよう。紫式部が『白氏文集』に対する深い知識を持ち、それを生かして自分の作品に使ったことは想像するに難くない。

また、『源氏物語』にも文集そのものにそのまま言及した所がある。ここでは、一つの例を挙げよう。

（源氏物語） 「かの山里の御住み処の具は、え避らずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、またさるべき書ども、**文集**など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。」（須磨）

上に引いた引用文は、左遷された光源氏が須磨に赴く前に、家来に荷物を用意させるシーン

である。この「文集」とは、いうまでもなく『白氏文集』を指す。「行く先知らぬ」という時でも、遙か遠くまで行っても、光源氏は『文集』を携え、一緒に旅路に上がろうとした。『文集』は、光源氏の一番の愛読書として、流謫の地、荒れはてた須磨では、彼の心を支える大きな力であった。つまり、『白氏文集』は、光源氏の心及び『源氏物語』においては、なくてはならない重要な位置を占めているようである。

### 3. 引用表に見る引用の特色

『源氏物語』の中における直接引用の詩句を取り上げ、以下の引用状況表を作ってみた。これらの詩句は全て源氏をはじめとする登場人物たちが口ずさんだものである。

表1 詩句の直接引用状況表

原文	巻名	詠み手	原典詩句	原典詩名
「正に長き夜」	夕顔	光源氏	八月九月正長夜	雑律詩「聞夜砧」
「幼き者は形蔽れず」	末摘花	光源氏	幼者形不蔽	諷諭詩「重賦」
「二千里外故人心」	須磨	光源氏	二千里外故人心	雑律詩「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」
「和して且清し」	胡蝶	光源氏	四月天气和且清	雑律詩「贈駕部呉郎中七兄」
「猶残れる雪」	若菜上	光源氏	子城陰処猶残雪	雑律詩「庾楼晓望」
「静かに思ひて嗟くに堪へたり」	柏木	光源氏	静思堪喜亦堪嗟	後続集「自嘲」
「窓をうつ声」	幻	光源氏	蕭蕭暗雨打窓声	諷諭詩「上陽白髮人」
「夕殿に螢飛んで」	幻	光源氏	夕殿螢飛思悄然	感傷詩「長恨歌」
「人木石にあらざればみな情あり」	蜻蛉	薫の君	人非木石皆有情	諷諭詩「李夫人」
「中に就いて、腸断ゆるは秋の天」	蜻蛉	薫の君	就中腸断是秋天	雑律詩「暮立」
「我が両つの途歌ふを聴け」	帚木	ある博士	聴我歌両途	諷諭詩「議婚」
「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」	玉鬘	豊後介	胡地妻児虚棄捐	諷諭詩「縛戎人」
「松門に暁到りて月徘徊す」	手習	僧都	松門到暁月徘徊	諷諭詩「陵園妾」
「酔ひの悲しび涙灑ぐ春の盃の裏」	須磨	光源氏 宰相中将	酔悲灑涙春盃裏	雑律詩「夷陵三宿…贈微之十七韻」

以上の情報を通して、以下の調査結果が明らかになる。

まず例数の割合を数えてみよう。全編の直接引用例は14例ほどあるが、全編合計例数154例のほぼ11%を占めている。そこで「詩句の朗詠」はわりに主要な引用技法だと言っても過言ではないだろう。

一方、その内の9例即ち6割強の詠み手は源氏その人自身である。しかも、その9例は、すべて源氏が目の前の光景やその場の心境を表すために、記憶の中にある漢詩の雰囲気を利用し、口ずさんだのである。原典としての漢詩と徹頭徹尾合致しているとは言えないが、意味にせよ、雰囲気にせよ、原詩とほとんど変わらない。源氏が『白氏文集』をこれほど詳しく、なお自由自在に運用したことを考えると、漢籍は源氏の心を支える大きな原動力だというべきであろう。作者もまた『白氏文集』に相当親しんでいたと言うべきだろう。

次に、若干の具体例について分析を行いながら、朗詠の経緯と作者の意図をそれぞれ探究していこう。

## 4. 具体例分析

### 4-1. 雰囲気の利用

(源氏物語) 「耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて、『正に長き夜』と  
うち誦じて臥したまへり。」 (夕顔)

(白氏文集) 「八月九月正長夜、千声万声無了時」 (雑律詩「聞夜砧」)

源氏十七歳の年の九月二十日に、病の癒えた源氏は、夕顔の元侍女右近に夕顔の素姓を尋ね、優しく柔順な夕顔の面影への回想に悲しみ沈んだ。そして、「耳かしがましかりし砧の音」のような思い出の場所を思い出し、ふと例の漢詩を口ずさんだ。

「耳かしがましかりし砧の音」の場所についての描写は、「夕顔」巻には、もう1箇所ある。即ち、

(源氏物語) 「(前略) 白栲の衣うつ砧の音も、かすかに、こなたかなた聞き渡され、空  
とぶ雁の声とり集めて忍びがたきこと多かり。」 (夕顔)

上の場面は、極めて騒々しくて悲しい夕顔の住まいの環境についての描写である。時は、夕顔が死ぬ前夜の八月十五日夜と翌朝に設定されている。

上の二つの例は、共に白詩の「聞夜砧」を踏まえていると既に指摘されている。では、「聞夜砧」は、一体どんな雰囲気を描いているのか、以下に、それについて説明をしておく必要がある。

(聞夜砧)	「誰家思婦秋擣帛、 月苦風凄砧杵悲。 八月九月正長夜、 千声万声無了時。 応到天明頭髮白、 一声添得一茎糸。」	(誰が家の思婦か、秋帛を擣つ) (月苦かに風凄じくして、砧杵悲しむ) (八月九月、正に長夜) (千声万声、了る時無し) (まさに天明に到らば、頭尽く白かるべし) (一声添へ得たり、一茎の糸)
-------	------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

中国の伝統詩において、砧の音は、秋夜、月光、そして旅の夫の留守を守る女性の思慕の情と切り離すことができない。月光冴え渡る秋の夜空に、「トーントーン」と澄んで響き渡る砧の音が、衣を打つ孤閨を守る女性の姿と相まって、読者に悲痛の念を起こさせるのである。こういうイメージを素材にして創作された詩は、「聞夜砧」だけではなく、李白の「子夜呉歌」や謝恵連の「擣衣」等、数多くある。そして、『和漢朗詠集』にも多く引かれている。それで、漢籍に精通した作者が、砧の音、孤雁、秋夜、月光及び思慕の情といった描写を借用し、自分の意思を伝えるということは、何の不思議もなくあたりまえのことであろう。

八月十五日夜は、そもそも満月になって、一家団欒になる日の象徴であるが、しかしながら、八月十五日夜の雰囲気においては、紫式部は、「聞夜砧」の悲しさを引用し、砧の音、孤雁、秋夜、月光などを通して、秋の哀れさと人生の無常を訴えている。そういう「人情の常」と対峙する描写は、夕顔の死のため、自然と伏線を敷いておいたのである。

上の例で、時点については、一つは八月十五日夜と翌朝であり、もう一つは、九月二十日の夕暮である。ちょうど「八月九月正長夜」の範囲に入っている。「八月十五日夜」においては、「夜の長さ」を感じた砧を打つ女性の悲しさに等しい雰囲気だけを借用したのであるが、「旅の夫の留守を守る女性の思慕」のような気持は、その場で特別に示されなかったのである。ただし、後の九月二十日の例をまとめて考えると、作者の心を込める工夫が明らかに見えてくる。源氏は、その日に、自らは「耳かしがましかりし砧の音」を耳にしなかったのであるが、夕顔の追慕によって、あまりの悲傷で秋の夜の長さを感じたため、その音を思い出すと、「聞夜砧」を詠むとかは、当然なことのはずであった。異なっているのは、作者は、夫の帰りに首を長くした思婦の気持を、夕顔へ追憶した源氏の姿に置き換えただけである。

ちなみに、このあたりの引用については、「月、雁、砧の三点セットが平安貴族の間に、遠地の夫を思う女の情を詠むパターンとして受け取られていたかと思われる。物語のこの場面の時刻は月の明るい十五夜の夜明け方である。夜更けではないから、女が砧を擣つのはやや不自然であるが、それも発想がこのような定形化した題材に縛られたためであろう」という記述がある<sup>3)</sup>。確かに、翌朝における「砧の音」の引用は、やや牽強附会のようなものであるが、例の雰囲気の引用に対して、「砧の音」がなくてはならない重要な要素なので、描写を効果的にするために、作者が「砧の音」という表現を借用したのが、むしろ自然な表現として作品の中に溶け込んでいったように考えられる。

また、漢詩の特徴の一つとは、文が短いのに、含んだ意味が想像以上に深いということであるが、紫式部は、まるで完全にその内在的な意味をも理解したようだ。例えば、このあたりの引用において、ただ言葉或いは詩句の引用だけではなく、その含んだ意味を夕顔が死ぬ前から、死後の源氏の追慕までの全場面に用いている。更に、「聞夜砧」に於ける現世に生きる恋人同士の思慕を、ここでは、現世の源氏が霊界の夕顔を追憶したのと改めたのは、たぶん作者の意図的な構想なものであろう。

## 4-2. 心境の借用

(源氏物語) 「月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。『二千里外故人心』と誦じたま

へる、例の涙もとどめられず。」 (須磨)  
 (白氏文集) 「二千里外故人心」 (雑律詩「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」)

源氏は須磨に流され、秋を迎えて、八月十五夜、月を眺めているところ、都の方々を回想しながら、ふと白居易の「二千里外故人心」を口ずさんだという場面である。

引かれた詩の題は「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」とし、白居易と友人の元稹との贈答詩である。原文は以下の通りである。

「銀台金闕夕沈沈，独宿相思在翰林。」	(銀台金闕，夕べに沈沈，独宿，相思ひて翰林に在り)
三五夜中新月色，二千里外故人心。	(三五夜中，新月の色，二千里外，故人の心)
渚宮東面煙波冷，浴殿西頭鐘漏深。	(渚宮の東面，煙波冷やかに，浴殿の西頭，鐘漏深し)
猶恐清光不同見，江陵卑湿足秋陰。」	(猶恐る，清光，同じく見ざるを，江陵は卑湿にして秋陰足る。)

この詩は白居易三十九歳の時の作である。親友の元稹<sup>4)</sup>は宦官の劉士元と争い、江陵に左遷された。白居易は親友の左遷に驚き、元稹のため度々上書し、弁護すると共に、手紙や詩を書き送って同情を寄せていた。この作品もその一つで、八月十五日、中秋の明月を見ながら、一人宮中で宿直している白居易が、遙か遠く流されている親友の元稹を偲んで詠じた詩である。「私がいる長安に上った月は、二千里を隔てようと、美しい光が変わらず、輝いているに違いない。私がこの月を見て君のことを思っているように、君も江陵の月を見て私のことを思っているだろう。荒れ渡る江陵の地で、君はどんな気持なのか」という作者の思いである。では、須磨にいた源氏はどんな思いであったのか。

まず、「殿上の御遊び恋しく」に示されるように、十五日の夜、宮中で開催された管弦のお遊びの光景が、源氏の脳裏に浮かび、「所どころながめたまふ」のように、「自分が月を眺めながら都の方々のことを思っているように、都にいる紫の上などの女たちも、きっと私のことを思っているだろう」と源氏は思いこんだのである。

更に、「故人心」とは、「左遷中のあなたは、現在どのような心境であろうか」と白居易が親友の元稹の心を思っているという意味であるのと同じく、源氏は、「二千里外故人心」を口ずさんで、都にいる女達が、「今どんな気持をもっているのか」と思ってやっていた。続いて、藤壺の「霧やへだつる」の歌を読んで、その時その時のことを回想して、恋しくて涙が出てきた。「猶恐清光不同見，江陵卑湿足秋陰」に示されるのは、「江陵の地は、低く湿気がちで、秋も曇ることが多いから、君がこの清らかな月を私と同じように見られるのか」と、白居易が心配していたことである。これに対して、源氏は藤壺の歌を思い出し、「都の藤壺は私と共に、こんな美しい月色を共有できるのか」と、白居易と同じ恐れで、不安になっていた。

このあたりの引用について、作者は「位置交換法」を用いた。須磨に流れた源氏は、境遇上では、左遷された親友の元稹と似ているから、一般的に元稹と同じ立場に立って問題を考えるはずだったが、しかしながら、この時の源氏は、都にいた白居易の詩を詠んで、居場所が正

に逆である白居易の立場と同じ思いをしている。換言すれば、源氏は居場所の制限に限らず、自分の立場を作者の白居易と同じであると思い、白居易が元稹のことを思う方法と同じように、都の女達のことを思いやっている。このように見れば、このあたりの引用は、左遷の境遇より、詩における白居易の思いのほうが更に重要だったと言えよう。

### 4-3. オリジナルな借用

- (源氏物語) 『『ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらす朝の袖かな  
幼き者は形蔽れず』とうち誦じたまひても、鼻の色に出でていと寒しと見えつる御面影ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。』 (末摘花)
- (白氏文集) 「幼者形不蔽、老者体無温」 (諷諭詩「重賦」)  
(幼者は形蔽はず、老者は体温なる無し)

源氏が詩句を口ずさんだ形で、「重賦」の詩句の直接引用を扱っていることは明瞭である。ただし、作者が引いたのはたった一組の対句であるが、引かれた「重賦」の詩句のイメージは「末摘花」巻の全体に漂っており、更に他の巻で述べられた末摘花の一生にも広がっている。

源氏十八歳の年、常陸の宮の姫君（即ち末摘花）は、父宮亡き後、荒れ果てた邸にひっそりと暮らしていた。その人に亡き夕顔の面影を求めて、源氏は少し思いを寄せていたが、頭中将も一方ならぬ関心を持っていると知って、競争心から急いで末摘花の姫君と深い仲となった。しかし、彼女は、意外にも、女らしいおやかさもなく、気品もなく、とりわけ高く長い鼻の先が末摘花のように赤いことに、源氏は驚いてがっかりしてしまった。この不本意な結縁を悔しく思いつつ、この孤独で不安な姫君の世話をする庇護者となり始めた。その朝、車を門から引き出そうとして、鍵の預かり人を呼び出したところ、大変な老人が出てきた。その娘なのか孫なのかどちらともつかない年頃の女も助けに来た。服がぼろぼろで寒さが身にしみるといった彼女の哀れな姿は、きれいな白い雪とは対照的であった。こうして、源氏はこの光景を目にし、つい「幼き者は形蔽れず」という「重賦」の詩句を詠み出した。

白居易の「重賦」においては、人民を救済すべき税金が、君寵を得ようとする官吏に悪用されたため、農民にかけた納税の負担はますます重くなっていった。その挙句、農民達は着物も食べ物もなく、飢えと寒さに苛まれる状態に生きていたが、しかしながら、税金を大量に徴収したのに、政府の官庫へ入金せず、空っぽになってしまった。これは、重税の弊害を述べて、当時農民生活の苦しみを訴え、官吏の貪欲を諷刺した諷諭詩である。続いて、「末摘花」に関係する詩句を引いてみる。

- |               |                           |
|---------------|---------------------------|
| 「厚地植桑麻，所要濟生民」 | (厚地に桑麻を植う，要する所は生民を濟はんとなり) |
| 「歳暮天地閉，陰風生破村」 | (歳暮れて天地閉ぢ，陰風破村に生ず)        |
| 「霰雪白紛紛」       | (霰雪白うして紛紛たり)              |
| 「幼者形不蔽，老者体無温」 | (幼者は形蔽はず，老者は体温なる無し)       |
| 「悲喘與寒氣，併入鼻中辛」 | (悲喘と寒氣と，併せて鼻中に入りて辛し)      |
| 「歳久化為塵」       | (歳久しうして化して塵と為る)           |

源氏が「幼き者は形蔽れず」を吟詠した場合、「衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へる気色ふかうて」というその翁の家族の女の姿は、確かに「幼き者は形蔽れず」に示される様子と一致している。そして、季節は、雪が降っていた冬に設定されているのも、「霰雪白紛紛」の場面に等しい。

ただし、「老者体無温」においての引用は、作者が元の意味を変えて、「幼者体無温」としたようである。「あやしきものに火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり」という暖を取る手段を使っている姿から、「体無温」の印象は、入っていたわけである。作者の意図としては、「形不蔽」と「体無温」を共にその女のその一身に統一させたのである。実は、これはこの巻の文脈に沿うようにしたためであろう。なぜならば、この巻には、末摘花の姫君を翁の家族の女に重ねて描写しているから、その女の「形不蔽」と「体無温」の姿を描いているのが、実際に末摘花の姫君の現状を暗示しているのである。

「悲喘與寒氣，併入鼻中辛」は、「幼者形不蔽，老者体無温」にすぐ続く詩句であるので、源氏が「幼者形不蔽」を詠んでから、直ちに「悲喘與寒氣，併入鼻中辛」を思い出したのは、極めて自然なことである。この句の意味を考えてみると、悲しいあえぎと寒気が一緒に鼻に入って、なんとも辛くて、鼻はそれによって赤くなってしまう可能性がある。だから、源氏はそれを想像し、自ずと「鼻の色に出ていと寒しとみえつる」鼻の赤い末摘花の姫君を思い出した。作者の想像力の豊かさを思わせる。

「陰風生破村」に於ける印象は末摘花の邸の描写と等しい。即ち、「いといたう荒れ渡りてさびしき所」と描かれた故常陸宮の宮邸の風景である。

「常陸宮時代の栄華は、いま『重賦』の結句の『歳久化為塵』（歳久しくして、化して塵と為る）という結論と同じ状態にあらう」と、中西進氏は述べている<sup>5)</sup>。そうはそうなのではあるが、その結論を招いた原因は全く違うと言える。「末摘花」の場合は、父が亡くなったため、末摘花は、生活上の世話人を失い、しかも入金の手もなく、邸宅は、自然と荒廃し、常陸宮時代の栄華も塵となった。これに対して、「重賦」の場合は、貪吏の税金悪用のため、国庫の財産は、塵となった。前者は個人の問題で、後者は国の問題である。白居易は重税の弊害への指摘を通じて、官吏の貪欲と国政の暗さを諷刺しているが、紫式部は物事の移り変わりによって、人間の儂さと悲しさを伝えているようである。

「重賦」の冒頭の句「厚地植桑麻，所要濟生民」とは、「大地に桑や麻を植えるのは、人民を救済する目的からである」という意味である。この詩の中では、作者白居易は風刺的な言葉として扱っている。「こういう目的があるのに、人民を救済することができない」という作者の非難の意味がある。一方、作者は白居易の意図を完全に読み取り、「人民を救済する目的」を実現させ、源氏が末摘花を援助するシーンを作り出したのである。だからこそ、故常陸宮の靈魂の導きであろうかと、色好みの源氏自身でも、訳が解からず、可憐で醜い末摘花を援助しようと決心した。それは、主人公源氏の大きな包容力であり、また心優しさの一面であろうか。更に、作者自身の心優しさと善良さの一面でもであろうか。

「重賦」という詩においての引用は、「点を以って面を覆う」の独特な技法を使っていると思う。つまり、この詩と繋がっている雪の中の女の小さな場面描写を通して、「末摘花」巻の全ての筋とこの巻の主人公末摘花の一生を纏めて描いているのであろう。



#### 4-4. 描写技法と創作動機の借用

『白氏文集』には、景色や情景を描写した詩はたくさんある。朱金城氏の論述によれば、白居易の情景詩は大体三種類に分けられる<sup>6)</sup>。以下のようなのである。

- ① 単純に山水花鳥などを取材し、目の前にある情景を描いて、読者に自然美と芸術美の二重の美を楽しませる。
- ② 詩の前半は、景色や情景に対して描写し、詩の最後にそれについて感想を述べる。
- ③ 文字から、完全な情景描写詩に見えるが、実際に作者の直接に言葉にできない感情が含まれている。しかも擬人化された手法が多く使われている。所謂「意在興象之外」の通りである。

『源氏物語』に用いられた白詩は以上の三種類を全部含んでいるが、②と③の方が①より多いようである。また、紫式部はその詩の情景描写と含まれた趣旨及び作者の気持ちを借りるだけでなく、その詩の描写技法や詩の創作の背景をも利用して、物語の進行には色々な伏線を用意しておくのである。続いて、一つの用例を取り上げて、その引用の特色について考えてみる。

(源氏物語) 「東の高欄におしかかりて、夕影になるままに、花のひもとく御前の草むらを見わたしたまふ、もののみあはれなるに、『中に就いて、腸断ゆるは秋の天』といふことを、いと忍びやかに誦じつつ。」 (蜻蛉)

(白氏文集) 「黄昏独立佛堂前、 (黄昏 独り立つ 仏堂の前)  
満地槐花満樹蟬。 (満地の槐花 満樹の蟬)  
大抵四時心総苦、 (大抵 四時 心総て苦しめども)  
就中腸断是秋天」 (就中 腸を断つは これ秋天なり)  
(律詩「暮立」)

浮舟死後の翌年の秋になった。ある日、薫の君は明石中宮が住んでいる六条院を尋ねた。彼は東の高欄に寄りかかって、折から夕日の傾いていくにつれて、花の咲き乱れる庭の草むらを見渡していたが、ただ切ない気持ちになって、「中に就いて、腸断ゆるは秋の天」という句をひっそりと口ずさんだ。という場面である。

このあたりは、主人公が詩句を朗吟する形で、引用を行っている。「暮立」というのは、白居易が秋の夕暮に立って徘徊することを述べた詩である。引用された詩句の意味は、春夏秋冬いつも心は悲しいが、特に悲しいのは秋である。その中には、秋は他の季節より物思いが増すというイメージがはっきり表現されている。実は、その時期の白居易が一番苦しかったのだ。まず五十三歳だった母の陳氏は世を去った。そして同じ年に、三歳にしかならなかった娘の金鑿も夭折してしまった。母の死と重なる娘の死は、極めて彼を悲しませた。仏堂の前に母と娘を追憶する気持ちは詩の中に示されている通りである。

「夕日の傾いていく」夕方頃は白居易の詩の「黄昏」と合っている。前に「秋の盛り」という言葉が出ているから、季節の設定も、詩と同じ秋としている。薫は「東の高欄」に寄りかかって夕日を眺めているが、白居易は「仏堂」の前に立って眺めている。二人とも、目の前の情景を目にし、人生の苦しみと哀れを思い、愁傷な気持ちでいた。

一方、描写的には多少相違がある。薫の君が見渡したのは、「花のひもとく御前の草むら」のように、花の咲き乱れる庭前の草むらであるが、白居易の目に入った情景は、一面に槐の花が散り敷き、木に蝉の声が喧しいというのである。

ただし、浮舟を亡くした薫の悲傷は、ここでは、まさに白居易の家族を失った悲しみと重なっている。「暮立」の詩の文字から、白居易の苦しい気持ちは分かるが、その苦しみの理由は表現されていない。なお、紫式部は、ここでは、外在的な詩の情景と詩人の気持ちを、内在的な詩人の哀れな遭遇と、共に自分の作品の中に用い合わせて、大君と浮舟を亡くした薫の心の哀れとその二人への執心を読者に伝えたのである。

ほかには、この詩の引用については、もう一箇所ある。これは丸山キヨ子が既に指摘している。

(源氏物語) 「秋の空は、いますこしながめのみまさはべる。つれづれの紛らはしにも  
と思ひて、先つころ、宇治にものしてはべりき。庭も籬もまことにいとど  
荒れはててはべりしに、たへがたきこと多くなん。」 (宿木)

宇治の「庭も籬もまことにいとど荒れはててはべりしに」の情景に触れてから、薫の君は亡くなった父の源氏のことを思い出した。父の死と大君の死による二人分の苦しみは、白居易の悲痛と重なり、「秋の空は、いますこしながめのみまさはべる」に示されるような気分となっていた。

ちなみに、「断腸」という秋の印象は、全編に所々漂っているようである。桐壺、夕顔、藤壺、紫の上などの主人公たちの死は、皆、秋に設定されている。追憶や別れのシーンもほとんど秋にある。作者は秋の哀れを借用し、人生の哀れと世間の無常を訴えているのであろう。

## 5. 終わりに

本稿では、実例を取り上げ、「点一面一点」の分析方法を使って、漢詩の引用の特色及び作者の創作意図について探ってきた。「点一面一点」というのは、即ち、先ず、引用の詩句という点を取り上げ、次に、二作品の創作背景・引用される原詩の意味と実質・『源氏物語』の文脈・関係人物の一生などという面に展開して考察し、最後に、作者の意図と引用の特色という点に帰結するという分析方法である。

引用例を分析した結果、以下の結論が得られた。

- 1) 全編引用例の割合からみると、「詩句の直接引用」は、わりに主要な引用の技法だと言える。その内、六割強の詠み手は、源氏その人自身である。
- 2) 引用例を「雰囲気の借用」「心境の借用」「オリジナルな借用」「描写技法と創作動機の借用」という四種類に分けて分析を行った。その分析結果によると、これらの借用は100パーセント原典としての漢詩と全く合っているとは言えないが、意味にせよ、雰囲気にせよ、原詩と大同小異に見える。だから、『白氏文集』は源氏の心を支える大きな原動力だというべきであろう。また、作者は『白氏文集』に相当親しんでいたと言っべきであろう。

3) 紫式部は、原典としての詩の情景描写と含まれた趣旨及び作者の気持ちを借りるだけでなく、その詩の描写技法をも詩の創作の背景をも再利用し、物語の進行には色々な伏線を用意しておくのである。本稿では、実例の分析を通し、そういう作者の工夫を明らかにした。

総じて、紫式部は、恐ろしいほどに漢詩文に通熟しながら、しかもそれを換骨奪胎し、独自の文学の創作材料として自由自在に駆使するのである。

今後は、以上の研究結果を踏まえながら、本稿ではまだ触れていない引用例を分析し、更に詳しく作者の意図と引用の技法を考察する。また、『源氏物語』の中には漢籍の作品が大量に用いられているのは、周知のことである。『源氏物語』、この空前絶後と言われる平安文学は、中国の文学に影響を与えているかどうか注目し、その逆影響はどういうふうを受け容れられているのかを探究したい。

註

- 1) 『白氏文集』の引用例数は、漢籍の引用合計例数の59%を占めている。以下の調査表は、筆者が2003年に修士論文を書いている間に、『源氏物語①②③④⑤⑥』（日本古典文学全集・小学館）と先学たちの指摘を参照にして作ったものである。

漢籍文献	例数	漢籍文献	例数	漢籍文献	例数	漢籍文献	例数	漢籍文献	例数
白氏文集	154	史記	23	漢書	8	柳毅伝	2	陶淵明詩	1
長恨歌伝	4	戦国策	2	晋書	2	飛燕外伝	1	列子	3
鶯鶯伝	2	莊子	3	論語	1	後漢書	3	劉禹錫詩	1
任氏伝	1	礼記	2	詩経	3	韓非子	3	蒙求	7
遊仙窟	4	尚書	1	儀礼	1	述異記	3	荀子	1
文選	8	元稹詩	1	列仙伝	1	和漢朗詠集	13		
総合計例数			259例			白氏文集		59.4%	

- 2) 全編で白楽天の詩句を引用した箇所は154例もある。その引用例数は筆者が調べてまとめたものである。『源氏物語①②③④⑤⑥』（日本古典文学全集・小学館）により、『源氏物語』巻別分類の順で、引用状況表を作成した。

巻名	例数	巻名	例数	巻名	例数	巻名	例数	巻名	例数
1 桐壺	12	12 須磨	9	23 初音	1	34 若菜上	4	45 橋姫	2
2 帚木	8	13 明石	1	24 胡蝶	6	35 若菜下	7	46 椎本	0
3 空蝉	0	14 濔標	0	25 蛩	0	36 柏木	4	47 総角	4
4 夕顔	9	15 蓬生	1	26 常夏	1	37 横笛	2	48 早蕨	0
5 若紫	2	16 関屋	0	27 篝火	1	38 鈴虫	2	49 宿木	10
6 末摘花	2	17 総合	3	28 野分	0	39 夕霧	3	50 東屋	4
7 紅葉賀	3	18 松風	1	29 行幸	2	40 御法	0	51 浮舟	2
8 花宴	0	19 薄雲	0	30 藤袴	1	41 幻	8	52 蜻蛉	5
9 葵	2	20 朝顔	4	31 真木柱	2	42 匂兵部卿	3	53 手習	6
10 賢木	4	21 少女	1	32 梅枝	1	43 紅梅	1	54 夢浮橋	0
11 花散里	0	22 玉鬘	1	33 藤裏葉	3	44 竹河	6	合計	154

- 3) 『日本古典文学20—源氏物語I』（小学館）443ページ  
 4) 元稹：(779—831) 中唐の詩人、政治家。字は微之。河南の人。官は宰相に至る。白居易と相携えて平易な詩風を唱え、世に元白体・元和体と称された。詩文集『元氏長慶集』、伝奇小説『鶯鶯伝』。  
 5) 中西進『源氏物語と白楽天』 岩波書店 1997年7月25日  
 6) 朱金城『白居易研究』 陝西人民出版社 1987年4月

## 参考文献

1. 新編日本古典文学全集・紫式部『源氏物語』①②③④⑤⑥（小学館）  
阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳  
①1994年3月，②1995年1月，③1996年1月，④1996年11月，⑤1997年7月，⑥1998年4月
2. 佐久節注解『白楽天全詩集』①②③④巻 日本図書 昭和53年7月15日
3. 紫式部『源氏物語』——中国語訳本 殷志俊訳（遠方出版社）1996年6月
4. 中野幸一校注・訳『紫式部日記』日本古典文学全集（小学館）1971年
5. 秋山虔『源氏物語事典』（学燈社）平成元年5月10日
6. 神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学の一考察」『源氏物語Ⅱ 日本文学研究資料叢書』（有精堂）昭和47年9月1日
7. 藤原克己「中国文学と源氏物語」——秋山虔編『新・源氏物語必携』別冊国文学（学燈社）平成9年5月10日
8. 丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会 昭和39年
9. 大野晋『古典を読む 源氏物語』岩波書店 1995年11月
10. 静永健『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版）平成12年2月25日
11. 李小梅選注『唐代情詩精萃』（陝西人民出版社）1993年6月
12. 藤井貞和「源氏物語と中国文学」『解釈と鑑賞別冊——源氏物語上』秋山虔編 至文堂 昭和53年5月1日
13. 水野平次『白楽天と日本文学』（復刻版）（大学堂書店）昭和57年
14. 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』（桜楓社）1964年
15. 花房英樹『白居易研究』（世界思想社）1971年
16. 遊国恩・王起・季鎮海・費振剛『中国文学史二』（人民文学出版社）1983
17. 巖紹溟著『中日古代文学関係史稿』（湖南文芸出版社）1987年
18. 西沢正史『源氏物語作中人物事典』（東京堂出版）2007年1月
19. 伊井春樹『海外における源氏物語の世界——翻訳と研究』（風間書房）2004年6月
20. 新聞一美『源氏物語と白居易の文学』（和泉書院）2003年2月28日
21. 小守郁子『源氏物語における史記と白氏文集』丸善名古屋出版 1989/08
22. 田中隆昭『源氏物語引用の研究』勉誠出版 1999/02